

＜令和元(2019)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期の病害虫の発生は全般に少なく推移しました。本ぼでは、保温開始後に炭疽病の発生が目立ち、10月と1月に降水量が多く日照時間が少なかったために灰色かび病の発生が増加しました。ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類は、平年よりやや少ない～平年並の発生でした。

1 炭疽病

8月までの育苗期は平年より少ない発生でしたが、10月から本ぼでの発生が見られ、その後平年より多い発生でした。

発生前から予防的に薬剤散布を行うとともに発病株は速やかに取り除き、ほ場外で処分しましょう。

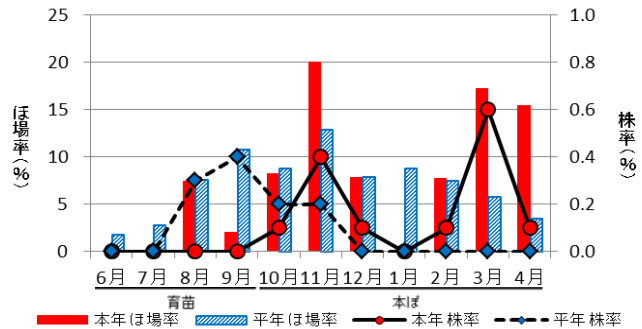


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

育苗期から本ぼまで平年より少ない発生でしたが、1月以降に発生ほ場が増加しました。

病原菌は土壤中で4～5年以上生存するため、本ぼで発生が見られたほ場では土壤消毒を適切に行いましょう。

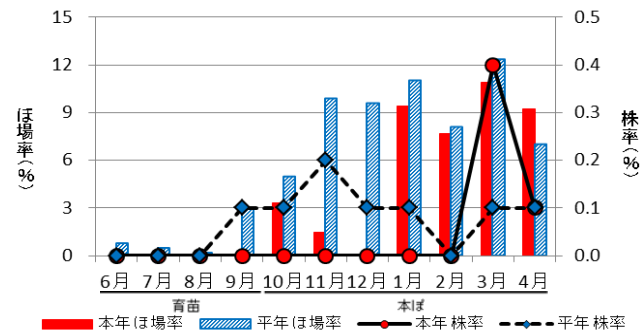


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

1月頃から発生が増加し、2月には平年より多い発生となりました。

本ぼでは、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに薬剤を丁寧に散布しましょう。

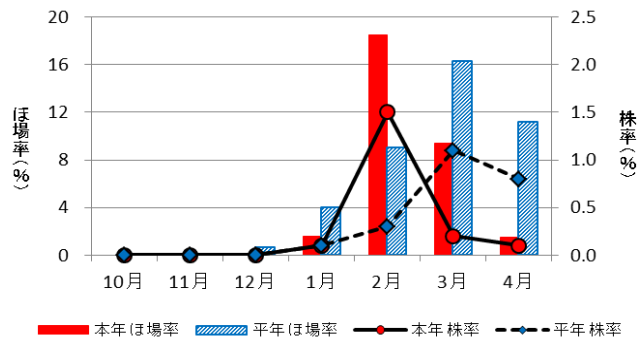


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

育苗期及び本ぼを通して平年より少ない～平年並の発生でした。

育苗期の防除を徹底し、本ぼに病原菌を持ち込まないようにしましょう。

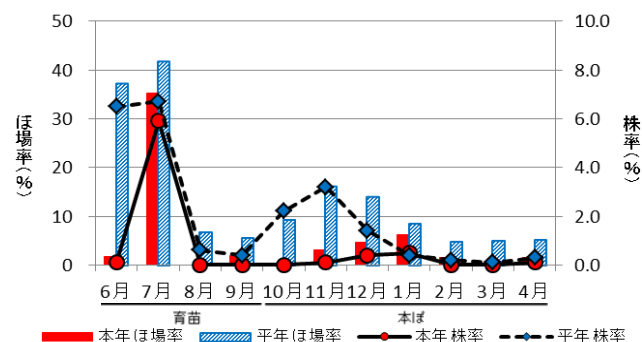


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

## 5 ハダニ類

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、平年よりやや少ない～平年並の発生でした。

12月から1月にかけて発生が増加しますので、早期発見・早期防除に努めましょう。天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

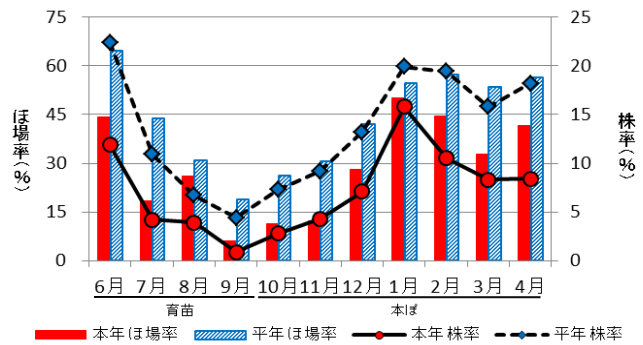


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

## 6 ハスモンヨトウ

本ぼで10月から12月に発生が見られ、平年より少ない～平年並の発生でした。

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

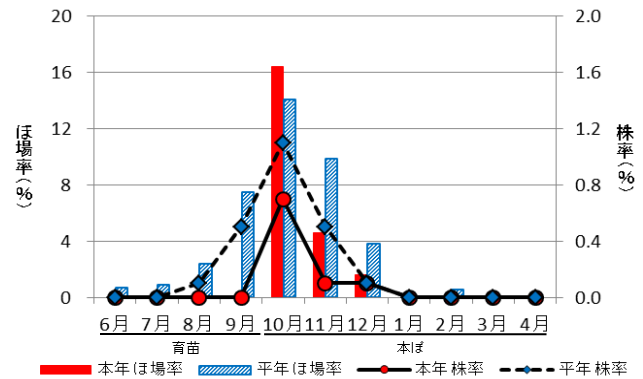


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

## 7 アブラムシ類

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られました。1月は平年よりやや多い発生でしたが、おおむねやや少ない～平年並の発生でした。

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

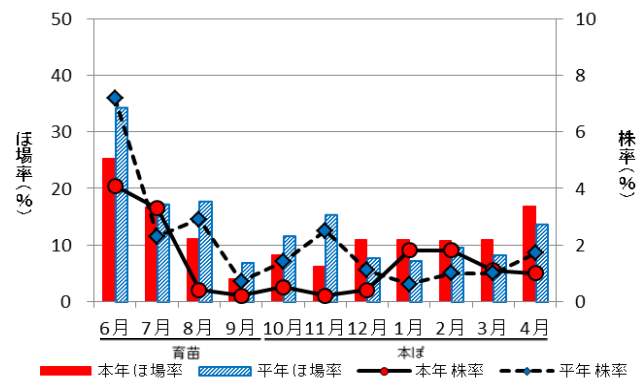


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

## 8 アザミウマ類

開花始めから発生が見られ、1月以降に増加し、平年並の発生となりました。

開花初期や春先はハウス外からの侵入が増加するので、適切に防除しましょう。

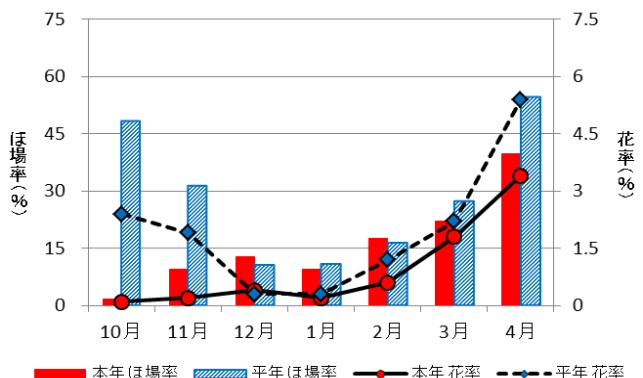


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病虫害防除を徹底し、本ぼへの持ち込みを防止しましょう。